

れたのは、母と祖父そふだった。それに、九つ年上の兄が父の代りになってめんどうをみてくれた。とりわけ母は、子どもの教育に熱心だった。毎日、夕食がすむと子どもたちに向つて言った。

「さあさあ、お前たちはこちらに来ておすわりなさい。お母さんが本を読んであげましょう。健次郎、台所に行つて下女げじよたちにも、こちらに来て一緒に聞いっしょくように言つて来ておくれ。」

毎晩まいばんこうして、家族を集めて二時間ぐらい本を読んで聞かせていた。その本は戦国時代の織田おだ信長・豊臣とよとみ秀吉の伝記や、中国の昔話の『水滸すいこ伝』などであった。こんな影えい響きやうを受けて、健次郎は、ひまさえあれば本を読むほど、学問が好きになつていた。